

未熟出生児の生育状況の調査

愛知県心身障害者コロニー 高 橋 彰 彦
 小 川 修 平
 黒 柳 充 男
 加 藤 孝 正
 植 村 勝 彦
 白 井 泰 子
 大 島 正 彦
 新 美 明 夫
 井 上 恵 里 子

〔研究目的〕

未熟出生児の生存例について、出生後の生育条件、母親の養育態度と、児の発育状況との追跡調査を行うことにより未熟出生という条件が発達に及ぼす影響について検討する。

〔研究方法〕

愛知県心身障害者コロニー中央病院新生児内科に入院した症例（昭和46年～54年末）を病歴記録により選び出し、児の状況を記録により調査するとともに、現在状態の診断評価を行う。

同時に、母親への調査により、病院退院以後の発育状況、養育上の問題等を把握し、生育条件を比較検討する。

55年度においては、対象児の選定とその病歴の調査とを行い、研究対象例の基礎的資料を入手することと、母親調査の方法、質問内容等についての検討に着手することを実施した。

〔結 果〕

コロニー中央病院病歴記録室保管の病歴（カルテ）を調査し、46年より54年末までの間に入院した、生下時体重 1,500g 以下の症例 291 例を得た。その中、記録内容

表 1 在胎週数と生下時体重（46～54年）

週 体重(g)	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	計
～500														0
501～600					1(1)				1(1)					2
601～700					2(1)		1(1)							3
701～800	1(1)	1(1)		1(1)	1		1(1)	1(1)			1		1	8
801～900					4(3)	4(2)	4(2)	1		1				14
901～999					2	3(1)	3	1					1	10
計	1	1	0	1	10	7	9	3	1	1	1	0	2	37
合併症無					2	2	1			1			1	7
死 亡	1	1		1	5	3	4	1	1					17

() 内数字は死亡例

(愛知県心身障害者コロニー中央病院新生児内科)

に不備のあるもの30例を除き、261例を当面の対象例とした。

今回は、その中、生下時体重 1,000g 未満のもの37例について出生時状況を記録により調査し、以下の資料を得た(男17, 女20)。

(1) 在胎週数と生下時体重(表1)

表に示すように、在胎週数は22週から34週にわたっており、26, 27, 28週に集中している(26例, 70%)。この26例のうち、体重が 801~999g のものが20例であった。

入院後の診断により脳組織になんらかの異常をおこすであろうと思われる合併症(脳内出血, 髄膜炎, 無呼吸発作, けいれん, 核黄疸等)が認められたものは30例(81%)に達し、低体重のみのものはわずかに7例であった。

死亡例は17例(46%)であり、そのうち2例は合併症の認められないものであった(生下時体重 850g, 700g)。

(2) 出生時仮死(表2)

記録上、仮死有とされているものは13例であった。

表2 出生時呼吸障害と合併症(37例中)

合併症	アプガー・スコア			仮死無	不明
	1~6	6~	不明		
⊕	7	4	2	11	6
⊖	0	0	0	7	0

Apgar Score は1~6点7例, 6点以上4例, 記入なし2例であった。仮死無と記入されていたもの18例, 仮死有無についての記入のないもの6例であった。

なお、前述の合併症の有無との関係を見ると合併症の無いものは全例(7例)とも仮死も無いとなっている。

(3) 分娩方法と胎位

全例が自然分娩であった。

胎位は、頭位29例, 骨盤位7例, その他1例であった。

(4) 母親の年齢

出産時の母親の年齢は、20~24才12例, 25~29才12例, 30~39才11例, 不明2例で、年代による差は20代に多い。

未熟児に対する母親の態度について

国立精神衛生研究所 池田由子

〔まえがき〕

未熟児に関しては子ども自身の発達, 疾患などについての研究が多く, 未熟児の母親, とくにその心理的問題についての考察はきわめて少ない。われわれは精神衛生の立場から未熟児を持つ母親の2群について面接調査を行ったので報告する。

〔研究対象および結果〕

研究対象となったのは、千葉県松戸市において年間全出生児8,000人の5.4%前後出生する未熟児の母親である。グループ1は月令3~4カ月児の母親174名, グループ2は年令1才6カ月児の母親280名である。松戸市衛生部健康管理課と国立精神衛生研究所の協力により, 医師, 心理員, ソーシャルワーカー, 保健婦がこれらの母親にアンケート調査, 個別面接, 集団での話しあい等を行い, 未熟児の母親の態度を調査した。

①結果(グループ1)

グループ1, すなわち, 月令3~4カ月児の母親およ

び父親の年齢, 学歴, 職業は表1から表6に示すとおりである。

また、これらの児童の出生時体重および保育器収容の日数は表7および表8に示してある。

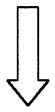
これらの母親174名のうち約96%に当たる167名は、「未熟児」という語を妊娠以前に知っていたが、学歴中卒の者の中には知らぬ者もあり、「未熟児」を欠陥や機能不全等マイナス・イメージと関係づけているのは17名であった。また未熟児健診に来所しながら「わが子は未熟児でない」と確信している母親も17名いた。

妊娠中未熟児を自ら予測した者は25名, 分娩後未熟児であることを88名は医師から, 43名は助産婦などから, 8名は家族から知らされている。誰も話さないが雰囲気でもわかったというのは10名である。

対象児の半数84名は表8のごとく保育器に入っているが、収容日数7日以上54名についてみると、その間1



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔研究目的〕

未熟出生児の生存例について,出生後の生育条件,母親の養育態度と,児の発育状況との追跡調査を行うことにより未熟出生という条件が発達に及ぼす影響について検討する。